



学校には学校の教師の権威というものがあつて、家庭には家庭の両親という者の存在理由というものがあつて、それで、子供たちは反抗しないで一つの秩序に従つて、すくすくと伸びていた時代がある。

そして、御飯を食べていくだけでも大変なのに、人間関係や価値観はしっかりと生きていたという時代があります。例えば、終戦直後、焼け跡の中に、闇市があり、やぐざが横行していた。それでも国民は本当に乏しきを分けあつた生活がありました。

### 雑草を生やしてはならないと思つ前に自分の肥やしにしよう

私の教えとは、人間の苦しみを救うことが目的です。そこで私達人間の方からいいますと、苦しいめに達することが大切である、この事が重要なことです。つまり、そこに本当の幸せになる機会が与えられるからです。ここに私の慈悲が働くのです。一見、平和な快樂の生活というものは、どうしても、うきうきしていて心が落ちつかない。従つて深く物事を考えることができないのですが、何か困つたことにぶつかり、苦しめに達すると、どんな人でも真剣に人生を見つめるようになります。明治維新の改革、敗戦後の変革はみな難儀かん難の中に生活されました。ただ、その難儀に反抗したり、又はいたずらに我慢したりしないでそれをよくかみこなして自分自身の心の滋養物にとりこまれたので、これが大変大事なことなのであります。

私達夫婦は毎年春のゴールデンウィーク時は賑やかな桜の花見も終わり、一昨年からは紫陽花(アジサイ)を挿し木から苗木を育て、約二百本植えた、広い境内の草取りをするのですが、太陽の恵みで育つた草で隠れていたアジサイの根元に敷き詰めて肥料とします。

昔、農家の田の草取りの智慧を頂き、不要なもの、やつかしいなものを捨てないで我が内へ取り込んで肥料とし、立ち上がるエネルギーとするのです。

誰でも面白くない、憎い、恨めしいといった心を起ささないものはありません。もとよりこれは相手のある話で、先方が自分に対して、又は自分のまわりに対して良くないことをしたからですが、佛教ではそれにもかかわらず、こうした心を一まじめにして、「煩惱」といつていやしめます。先方が悪いからこんな心が起きたので、あなたがこれを「煩惱」などといやしめることはないようですが、しかし、どんな事情からでも、このような心は「鉄から出た錆が鉄を食つ」といわれるように、一はこの心のために中毒を起し相手に

対して何かの行動をとる前に、早や自分で自分を傷つけています。それですから、こうした心は正しい心の発達を妨げる雑草であると申さねばなりません。そして、雑草は取り除かねばなりません。「こんな根性を起してはいけない」と自分の心を叱りつけて、かえつて先方の良くない仕打ちを、もつ一度考え直してみる、それはむしろ自分を鞭撻してくれる活きた教訓であることを味います。

これが雑草を取つて稲の根元におしこんで肥料にする所です。

### 父母は国家社会そして家庭の中心曼陀羅

想えばあの敗戦は日本人として初めての体験で世界で初めての長崎、広島での原子爆弾の破滅的洗礼の中から不死鳥の如く立ち上がり、世界一、二の経済成功国にと崇められたところがバブルが弾けると一変して破綻の一途、子供の中にも信じられない犯罪・悲劇、夫婦間に、高級官僚にも勿論企業経営者に

も・・・等々に信じられない犯罪が毎日のようにテレビや新聞にインターネットに報じ

戦後の見事な経済的復興と昨今の想像を絶する犯罪とは実は共通の因子が存在していると私は考えるのです。

女性の社会参加に大きな関係があるのではない。日本家庭の伝統的女性社会を評価することに大きな誤りがあつたと提言したいのです。成功の種子に女性、お母さんが家庭中心に祖父母を敬い、戦争で犠牲になつた夫や友人の英霊を弔う精神、昭和天皇の捨身(無私)全国激励御行幸を全国国民が歓迎されました。

当時は日本伝統文化を象徴する佛教的無常観を味わうに充分な温かい家庭があつた。冬の降り積もつた雪解けの後に春が来て小鳥が囀り、梅の花が咲く、移り変わつてゆく四季、わび(静かに澄んで落ち着いた味わい。茶道や俳諧(はいかい)の極致)さび(古びて趣があること。枯れてしびみのあること)、山水画の黒と白の二色に無限の現象に無常観を充分知つていたので、バブルが弾けた後の破綻の原因種子はどうでしょう。

戦後の大きな誤りは立派な日本の伝統的な家庭の主婦業を経済的価値を生み出す社会の仕組みとして構築する智慧に取り組まず、た、男女平等思想が男女が同一の業務に対して同一賃金(現在も未達成)の前に女性の社会進出が進められてきている事に起因するのではないか。

素晴らしい科学の進歩による国民一人当たりのGNP(国民総生産。一週で一定期間に生産された、財貨およびサービスの総額)飛躍的拡大、都会の家庭は夫婦共稼ぎ、男女とも衣・食・住の衣は昔のように和服、洋服の仕立物を愛用し立職人の匠の技が尊ばれることが無くなり、柄と安く早い流行のものだけ、商品が溢れるほど生産され、誰でも簡単に商売でき、簡単に倒産それでも飽きずにタケノコのようにスーツと店が開店され、パーツと消えてゆく。

欧米の限らない欲望を満たす自由。これに対して佛教の自由は欲望から自由(無碍)であることとをハッキリ自覚し無ければならない。

(次号へ)

## 幸せライフのお手伝い!

総合建設業

## 酒井技建

株式会社

代表取締役 酒井武義

〒640-0416

和歌山県那賀郡貴志川町長山277-68

TEL(0736)64-6776 FAX(0736)64-8908



## 皆さんのスーパーみち屋株式会社

代表取締役 道畑 勇

本部 和歌山市岩橋729番地の6

TEL (073) 473-4197

松島店 和歌山市加納246番地の1

TEL (073) 474-3500

貴志川店 那賀郡貴志川町大字北山517番地

TEL (0736) 64-7020

# 現世の救い観音菩薩



「郷里の雨錫寺に建つ十一面観音」

『法華経』の第二十五品は『観世音菩薩普門品』。古来からこの章だけ取り出して『観音経』として独立した經典となり、多くの人々に読まれてきた。自坊では朝の勤行は『理趣経』を称え、毎夕には『観音経』を称えております。この『観音経』の主役は観世音菩薩略して観音さまです。

観音さまのその容姿が大変美しい。聖観音にしても、千手観音にしても、如意輪観音にしても、その端麗な容姿をじっと見ているだけで心の中まで洗われる気がします。どんな人生の苦難にも耐ええる勇猛心を備えながら、あらゆる人々を救ってくださる慈愛に満ちあふれた姿が観音さまの特徴です。

観音菩薩の名前を知らない人は稀(まれ)です。観音さまは昔から庶民の信仰対象として親しまれてきた菩薩であり、『観音経』は日本人にももつとも広く読誦されたお経の一つであります。『観音経』は現世利益を説かれた通俗的なお経ですが、実は、浅きは深きなりであって、これほど宇宙生命の用(はたらき)を見事に説き明かされたお経は他にない。だからこそ広く東アジアの人々に、時代と地域と人種を越えて読誦され信仰されたのです。観音さまのお姿をじっと見ているとそこに

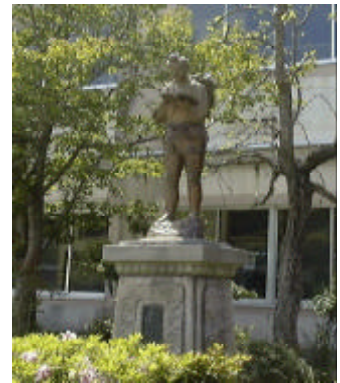
限らない人間味といいますが、人間らしさを感じます。しかし観音菩薩は、汚辱(おじよく)に充ちた凡夫の相(すがた)でなく、どこまでも人間を越えた相(すがた)をしている。人間の相に即しながら、人間の煩惱の炎をまったく消し去った超人間的な相を表している。そこに限りない魅力を感じる菩薩です。

観世音菩薩の『観世音』はアヴァローキイテエシユバラという梵語を訳した言葉である。玄奘三蔵(げんじょうさんぞう)はこれを『観自在』と訳している。観自在とは『世音を観る』ということ。この世の中衆生のあらゆる悩み、声を聞いて下さることであります。

観世音菩薩は観自在菩薩ともいわれますがその『観自在』とは、世間の悩める人々を救うことにおいて無碍即ち自由自在であるから観自在といえます。佛教で使われる自由自在の自由とは、『無我』『無心』の人にして初めて可能になる。何かに執着していれば、それにとらわれる。繫縛(けいばく)され、そこには自由はない。『ほとけ』は『ほとけ』ということ。とらわれ、執着を『ほとけ』とことです。無心になることであり(己の心を空しくして御仏の御心のままに従う)、人に対してわけへだてなくすることです。無心の人は一切のものを抱擁する。いつでもニコニコしている。その無心の人を『観音と呼ぶのであって、観音菩薩とは各人の当体そのものであります。人事処三相心という言葉が御座いますが、随処に主となればそこに自在の境涯が生まれ、どんな対象に対しても、どんな人に会っても無心の気持ちで応ずるならば、それこそ観自在菩薩を観ることが出来ます。自由自在の働きをする観音菩薩は三十三身に出現すること(間(かん)、髪(はつ))をいれない早さです。三十三身については別の機会に述べることに致しますが、『南無観世音菩薩』と一心に称名することによって

応現する。釈尊の時代には三十三数字は無限を表すともいわれ、兎に角ありとあらゆる人や仏となつて現れ、例えばキリストにはキリスト教の神となり、山田さん、田中さん等、衆生のすべての人々が応現してこの世に出現して衆生の悩み、衆生の願いに答え、救ってくださるのです。子供を育てるのには親となり、病人を救うためには医者となり、学問を学ぶためには教師に、盗難や交通事故を防ぐには警察官に、火災や災害を防ぐには消防士に、国を治め自治を治める谷は政治家にとあらゆる者の願いや希望、求めに応じて応現してくるのが観音菩薩です。

それでは観音菩薩はどういうときに出現するであろうか。それは、『一心称名』のときであります。一心に『南無観世音菩薩』と御名を称えるとき、そこに出現するのです。病気になる時、病気を治して下さいとお願ひするのにも良いのですが、眞の信仰は功利主義であつてはならない、御利益本位であつてはならない。病気がなある、なあらぬという結果を問うのではない。人間は何時如何なる時でも、心を苦しめます。ましてや病気になる時、ときには苦しみます。そんなとき只一心に『南無観世音菩薩』と称名を称えたとき苦しみの心が平安な心(平安成就)に変わって行きます。『南無観世音菩薩』と自然に称えて、病のこと、生き死にのことすべてを、大いなる力、絶対の生命である観世音菩薩におあずけし、おまかせするのです。そうすればおのずかと心も安らかとなり、その結果、病も快方に向かうのです。お金を儲けるためでなく、病気を治すためではない。功利心は宗教とは無縁なものです。



下津町立加茂第一小学校に建つ二宮尊徳銅像

# 観世音の一化身二宮金次郎翁

日本人は豊臣とか徳川とか、楠木正成、乃木将軍だとか政治家や軍人、戦後は企業人が偉いと思ってきました。でも戦前は全国の学校の校庭に二宮尊徳の銅像が建っていました。即ち学校教育の基本に貧しい家庭に生まれ、村の祭りに寄進が出来ない程の子供時代を送りながら、その後の尊徳翁は生涯観世音の一化身となつて日本のために尽くし、日本の文化、経済の向上発展を計られたのです。この二宮尊徳翁にこんなお話が御座います。金次郎翁が、飯泉観音(板東三十三所第五札所)へ参詣したある日、偶々旅僧がお経を上げていたのを聴聞して、大変有難く感じ、その終わるのを待って、『只今貴僧のお上げになつたお経は何とお経ですか』と聞いた。『観音経です』と答えた。そこで誠に恐れ入りますが、もう一度今のよう、日本流に読んでください』と頼み、それを拝聴して後翁は、『観音経は要するに、私に對して金次郎観音になれ』ということ。私に對してお経ですな』と云つたそうです。私はこの事を本で読みまして、二宮尊徳先生は実に偉い立派な人だと思つておりました。今は珍しく近くの加茂第一小学校の校庭に銅像が建つて居るのである。



### ある日突然の倒産、妻は家出、 観音菩薩に救われた方の 体験談

昭和三十三年三月号の「大法輪」に目を通していたら「観音信仰体験記」という次のような記事に心が走る。

私が今こうして書くことの出来る、この観音縁起が、もし何処かで私と同じ運命にある人に何かの力を与えることが出来たらと、観音経を念じながら筆を取りました。人間のたどる運命とは不思議なものです。今から丁度五年前、私は長岡で小さな商売を営んでおりました。それでも妻子五人を養うには充分で、平和な毎日を送っております。

ところが一寸した手落ちで商売に失敗し、それが原因で、ある日妻は四歳になる双生児と小学校二年と六年の四人の娘を残したまま突然家を出て行ってしまったのです。商いに失敗した矢先、他に生活の術を知らない私には、それだけでも大きな打撃でしたが、それよりもただ一人信頼していた妻に裏切られ、この先一体何を信じ、幼い子供達を育ててゆけばよいかと思うと、前途は真つ暗でした。私は實際妻を呪い、世間を呪いました。

このような私には、死が最も容易な解決の道でした。一度そう思うと、死は、恐怖よりむしろ大きな魅力でした。私は一家心中を考えましたが、何の罪もない子供達を道連れにするにはあまりにも可哀想で、無心に眠っている子供達の寝顔を振切つて、信濃川へ向かいました。途中にある観音寺の前を通ると、その日は丁度観音さまの縁日で、寺には灯明がともされ、読経の音が聞こえてきました。私のような無信心のものでも、死ぬ前には不思議なものです。何か敬虔（けいけん）な感じにうたれて、

子供達のご加護をお祈りしておりました。すると突然背後から肩を叩かれ、振り返ると久方振りに会う A 氏でした。A 氏は観音様の信仰家で、この日も参詣に来られた所でした。やがて死ぬ身でありながら私は A 氏に誘われるまま、近所の A 家へ行きました。そしているうち何時か張りつめていた心もゆるみ、このいきさつを話しました。A 氏は自殺の罪や、後の残された子供達の心の傷が如何に大きいものかを話され、死の覚悟で再出発したらどうか。今日あなたが観音寺の前を通りかけたのは、観音様のお慈悲に違いない。観音様に全てをまかせて明日から一生懸命に働いてご覧なさい。といわれました。更に A 氏は信仰の大切な事を説き、奥から数冊の本をもつて来て貸してくれました。それが大法輪でした。しかしその時の私にはまだ読む気力もなく、ただ明朝から出直す新しい仕事のことと頭が一ぱいでした。他に何の職能もない私は、次の日から行商を始めました。幼い双児をつれての慣れない商いには、歩くだけで精一杯でした。

そんな時、いつも私は A 氏のはげましと観音様のお慈悲を信じ、夜は子供達の寝静まつてから、お借りした大法輪の頁をひもといて行くうち、今まで一度も考えた事のない信仰の有り難さや、広大無辺の仏の慈悲が解るようになり、毎日に苦しい仕事も、何時か楽しみに変わってきました。それからの私は、毎日の商いの行き帰りに必ず観音寺へ詣るようになり、こうしている内、子供を保育園に預かって頂くようになり、心の重荷が次々にとれてゆきました。

私が、こうして再生できたのも、ひとえに観音様の御慈悲と信じ、やがてただ詣るだけでは物足りなくなり、どうかして立派な観音像を手に入れたいと思うようになりました。行商の間に、市で見付けた観音像は、とても私などの手に入る安価なものではない事を知り、ただ諦めるより仕方ありませんでした。

思い余つた私は観音様に願いを掛けて授けていただけこうと思ひ、毎夜観音寺へお詣りにゆきました。満願の夜、参詣をすまして床につくと、私は一生懸命観音像を拝写している夢をみました。夢から醒めた私は、すっかり力を落としてしまった。というのは生来、私は字も画も下手で、仏像の内でも最も美しい観音像が、どうして描くことが出来よう、私にはまだ信仰の力も何も無いのだと思ひ、朝の観音経を読んでいると、これだ、と思いました。観音経の一字一字を書きつらねていったなら、きつと下手ながらも私にも出来るに違いない。それからの私は、静かな夜を選んで、経文に祈りを込めながら書きつづけてきました。初めに御手、次に頭と、やつと二ヶ所だけを書けました。その時の喜びは例えようもありません。最初の一枚がこうして三ヶ月目に出来上がりました。私はその日、その像を部屋に掛けて、今までの思いが胸一ぱいになり、観音経を読みながら涙を流しました。私はこの最初の一枚を、観音寺へ奉納しました。そして一生に是非一万枚の観音菩薩尊像を拝写し、信仰の篤い方に、また反対に信仰を知らず暗い心で生活している人々に頒布したいと念願しております。

【知野孝治（とものこうじ）記】

### 弘法大師の言葉

#### すべて父と母

宇宙の生きとし生けるものは

すべて みな

これ父であり母である。

大日経開題

弘法のこのようなことばに接すると、大師は仏であると思わずにいられない。

生きとし生けるものこのことを佛教では一切衆生という。一切衆生という言葉には、御仏の大いなる愛が感じられて、しみじみとありがた。

お大師は、宇宙の生きとし生けるものは、すべて



有限会社 ミヤタケ

代表取締役 宮下隆博

〒640-8329

和歌山市田中町4-119

TEL(073)422-2327 FAX(073)436-5598



人に優しい音声発生装置!

有限会社 日本メディテックス

代表取締役 山口昭昌

〒641-0054

和歌山市塩屋5丁目5番43号

TEL(073)446-2009 FAX(073)446-3696



みな、父であり母である。「とっけとめられ、その様に呼びかけられました。このような見方は、自他を峻別(しゅんべつ)し、仏を見失った現代人にとっては、気の遠くなるような、とてもついでに行けそつにない感覚でないでしょうか。

しかしそうではない。実際に父母のいない人はいない。「諸法実相」素直に認め人としての原点に立ちかえったとき、現代人といえども古人と少しも変わらない、人は優しくなるようになっていくのです。

大師は『三教指帰』の中で、「私は先生に聞いたのですが、天地間の万物の霊長は人間である。そしてその人間のすぐれた行爲とは孝行と忠義である。その他いろいろちがった行爲があるけれども、この忠と孝は最も重要である。だから父母からいただいた自分の体をそこなわない。主君に危難があれば、進んで自分の命を投げ出してこれを助ける。そのようにして自分の名を挙げ、先祖の名を世に知らせることは、大変大事なことであって、その内の一つを欠いてはいけない。また一生の楽しみ最たるものは財産と出世である。百年間の親友でも妻や子を愛する気持ちには及ばない。子路(しろ)が出世をして孝行をしようと思ったときには両親はすでに死んでいたし、曾子(そうし)が立派な家に住めたのは主君に立派に仕えたからである。

しかもあなたは親もあり主君もあるではないか。どうして親に孝行、主君に忠義をつくさないのか。そつでなくて、いたずらに乞食の間に入り、むなしく課役を逃れる連中の間にまじっているではないか。それは先祖を辱めることであり、君子の恥すべき事である。しかし、あなたはそれを行っている。親類があなたに代わって恥ずかしがり、他人もあなたを見て顔をかくす。だから早く改心して、忠孝につとめばげめ。」と。

この大師の言葉は、現代において実に難しい生き方であると言える。自分の父母ですら父母

と考えない子供、父母もまた自分の子供を子供と考えない、ましては他人を人の子と考えない実に恐ろしい非人間的な世相であるからであります。自分の子供、自分の父母すら父母としない現実において、どうして生きとし生けるものに、父母を見出していくことが出来ましようか。それには自分の子供を子供とせず、自分の父母を父母としない原因、理由について考えてみることであり、それは悪欲と利己心がもたれている。しかし利己心と悪欲を断ち切ることほどむずかしいことはない。戦後五十年間の経済成長の中で多くの人々が利己心に流され、自由経済という名のもとに对立心ばかり助長され、人々の心はばらばらにされてしまったのです。

しかし、あらゆるものに絶望しつくしたところから、大師への帰依と生きとし生けるものの中に、父や母をみる事ができる仏心が沸き出てくるものです。

### 仏教小話

#### 犬に「御免」

江戸時代、妙好人(みょうこうじん)(真宗の在家の篤信者)の信仰に生きた讃岐の庄松という人が、富田村菊蔵と三本松の勝覚寺へ参詣した。本堂に上がると庄松がいきなり仏さんに足を向けて寝ころんだので、菊蔵がこれをとがめるところ、庄松は「親の家じゃ。遠慮には及ばぬ及ばぬ。さて、そついつおまへは継子(まこ)であるそつ、(庄松言行録)と言つたそつ。親は本堂にいる阿弥陀さんであるから、本堂で寝ころぶことは何も遠慮する必要はないそつ。自由無礙(むげ)な境地を表しているのである。讃岐の庄松は文字もよく書けぬ質朴な庶民で、思想など持っていないかった。しかし、その無意識の行動と言葉の中には天地を絶ち切るような生命の躍動がある。

また、庄松は臥(ね)ている犬の前を通るとき、必ず「御免」と言った。連れの坊さんがそれを聞きとがめて、「庄松よ、犬などにおじぎするから、人はお前を馬鹿にするのだ」と言った。庄松は答えた。「犬も十方衆生のうちだ。仏のお誓いのかかっているものだ。自分はそのお誓いを拜むのだ。」(庄松言語録)。これは誰にでもできることでない。わざとこんな真似をしても何もならない。動物愛護なども無縁なことである。因縁所生の中で生かされている自分を知り尽くしている者のみ、なしえる得る行動であり言葉です。

われわれの日常生活は、すべて他力によらないものはない。佛教で縁起のことを「因縁所生(いんねんしょしょう)ともいいますが、たしかにあらゆるものは因縁によって成り立っている。因は直接の原因、縁は間接の副因であります。

われわれの実際の生活はすべて他力であり、宇宙一切の力によって成立していることに気がつかねばならない。これが縁起であり、因縁であり、他力と云うことです。この因縁の深い理法を知れば、おのずと感謝の気持ちがあわく。自分が現在こうして生きているのは生かされているのであり、すべての他人や大いなる自然の恵みによるのであり、それを知るときおのずと「ありがとう」という気持ちを持たざるを得ないのである。

「人生の目的とは何か」を知ることなく生かされていることに感謝することが如何に大切であるかを教えていただいているのです。庄松は宇宙や人生の真相を謙虚な態度で観察し、感謝と報恩の生活を送っているのです。



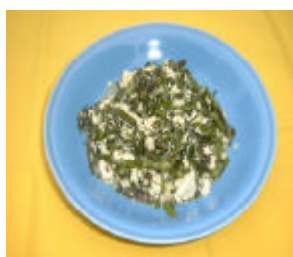
### 旬の山菜料理(セリ)

#### 芹の酒炒り

最近は少なくなった山菜の一つに芹が挙げられる。当寺の境内は自然環境が保護されていまして、芹の密生の秘密の場所がある。春の息吹を匂わせる美味しい芹の料理。



境内の密生芹



芹の酒炒り

材料：芹・豆腐・酒・みりん

醤油・調味料

作り方：芹を一センチ位の長さに切る

豆腐を手でほぐす

その一、鍋に酒を入れ温める。その上に刻んだ芹をいれ炒める。

その二、ほぐした豆腐を入れ、みりん、醤油調味用を入れ味を調え完成。

### 初心忘れるべからず

この言葉は六十五歳になる今日まで何度か心に留めた。最近読んだ山折哲雄先生の著書「佛教とは何か」の中で新たに「初心忘れるべからず」の語源と意味を理解した。この言葉に該当する心の状態を空海は「秘密曼荼羅十住心論」で人間の心が未熟な段階から悟りの段階十種のプロセスを経て次第に浄化される事を説き、鎌倉時代になって人間の内面的な「無我」を説くより、より人間の「心」の現象により多くの感心を示し、親鸞上人の「自然法爾」、明恵上人の「菩提心」、道元禪師は「正法眼蔵」で「求道心即ち発心を「発菩提心」という章で「座禅并道これ発菩提心なり」と説かれています。

「初心忘れるべからず」は十五世紀に能楽を大成された世阿弥(一三三二-一四四三)が彼の書「風相花伝」のなかで「初心」について説かれているのが即ち「初心忘れるべからず」だそうである。観世の流派に次の三箇条の口伝がある。

是非の初心忘れるべからず

時々の初心忘れるべからず

老後の初心忘れるべからず

はじめの「是非の初心忘れるべからず」は初段階の下手の未熟(非)をさとり、後の上手の段階(是)へと上進し向上すべきだとする意味で、第二の「時々の初心忘れるべからず」というのは未熟の段階から老後に至るまで、それぞれに似合の芸風があり、その時分時分の初心を自覚すべきであるとするのである。そして最後の「老後の初心忘れるべからず」とは、老後になって慢心したり油断したりすることのないよう戒めなければならぬと言つ意味です。それに付け加えて世阿弥は「命には終わりあり、能には果てあるべからず」とも言っている。仏の命は無限であるけれども人間の生命には終着駅があるが能には若くしての限界がないと言つ意味でもあります。私はここに素晴らしい九十歳の老女を紹介したい。彼女は四人の子息と一人の子女に恵まれ、お子さんの所を楽しく廻らされている。

彼女の夫は海兵、海大卒業で第二次大戦時は参謀として参戦、戦後は戦地で散った戦友に鎮魂の余生を送られたのです。

先日、ある会合で「子息達と席を共に食事をした時の話、普段、朝目覚めると必ず寝床をあげ、洗面をして鏡台の前に坐り、お化粧をされ、顔面マッサージを時間をかけて行って朝食時間には所定の場所に坐り家族に挨拶、新聞や読書がすむと日課の写経、昼前は約一時間近所を散歩、今のところ一人でなされるそうです。

筆まめで、はがきで感謝の気持ちや、思いやる気持ち、そして季節感を簡単に書かれる方です。

「子息の話で、九十歳にもなつて何時も身の回りを整理整頓し、顔面マッサージをすることの意味は必ずやって来る最後に醜い顔や醜い身の回りを人様に見せてはいけなと、若い時からの心得だと聞きまして、若い小生も感動いたしました。

日常のビジネスでも「初心忘れるべからず」の心で今日一日、一日一生の思いで仕事を、生活が終えられたらどんなに幸せなことだろうと思つのであります。

### ある信者からの手紙

三月二十日の「春分の日」が過ぎると、急に暖かくなりました。不思議ですね、季節の移り変わりがこのようにキチンと行われてゆく自然のしくみに今更ながら驚嘆するのです。しかも日本という国が南北に長い国ですからその四季の変化が顕著で美しく、日本独特の文化が生まれてきています。そういう美しい国、日本に生まれたことを本当に感謝して言ふのです。ハイキングで四季の農村や山村へ行きますが、小さな神社、小さなお寺が各土地、各所に必ず御座います。お地藏様も多いですね。そういう鄙(ひな)びた田舎の六地藏に美しい季節の花がたむけられており、手を合わせながら思つのです。

「日本ていいなあ」と。

岩屋山の福勝寺ってどんな所であり、どんなお寺だろうと、いつか行く日を夢見て心が躍るのです。夏頃には訪ねたいと思つています

神戸市住吉台在住

齊藤敏彦

### 岩屋山 福勝寺、所蔵品が公開展示される

### 「加茂谷の歴史と文化と生活」を探る

- 一、加茂谷のはじまり
- 二、加茂谷と加茂氏
- 三、福勝寺と蓮如
- 四、加茂谷とみかん場所

### 下津町立歴史民族資料館

下津町上六八六

長保寺境内

電話四九二一四八二六六

期間：平成十二年九月末日迄



歴史民族館



福勝寺遊歩道に咲くシャクナゲの花

裏見の滝から階段を上るサイドにシャクナゲ、椿、山桃の木が植えられ、今はシャクナゲの花が綺麗に咲いている。

### 編集後記

この四月から四十年ぶりに聴講生として講座を受講することになり、毎週一回高野山へ登ることになる。六十歳を越える受講生は私他に一人、後は若者、やっぱり濛利としている。

講座は、現代社会と密教「日本の佛教が近年即ち明治二十六年アメリカ・シカゴ万国宗教会議で初めて紹介されたことを学ぶ」

その時、真言宗では土宣法龍(ときほりゅう)が日本佛教代表委員として出席、彼は「日本佛教各宗略史」と「日本佛教」を講演、会議後、土宣法龍は欧州(イギリス・フランス)に渡り、帰途インドに立ち寄り佛跡を巡拝して帰国する。イギリスで和歌山出身、南方熊楠氏と出会い、密教曼陀羅について二人は語り合っているとか熊楠の研究の背景に密教が存在していたかと、非常に興味を抱かせる講義である。



「愛之道」の石標  
下津町小松原の旧道に建つロマンの道しるべ、私達のへのメッセージのような気がする。